



報告Ⅱ

韓国民の苦難と希望

李文永

私は法の秩序に従った

私は皆さんの前に立ってまず感謝を申しあげねばならないことがあります。それは、私を含めて、多くの韓国における苦しめる友人たちのことを皆さんが絶えず祈りのうちに記憶して下さったことであり、またいろんな形で支援をして下さったことであります。

そして私が皆さんに差し上げられる贈り物は、やっぱり私が経験したものを皆さんにお伝えするということではないかと思ひます。私が申し上げる事柄の焦点は苦難ということであり、また苦難を通してはじめて形成される民主主義ということであります。私の話が多分に実存的でありたいと思ひます。その意味でいま申し上げたように、私自身が経験したことを語りたいと思ひます。

ちょうど一〇年になります。私は高麗大学から解職処分にあつて、以後、三回解職され、その間、八年半ほど大学から給料をもらえないという状況におかれました。一五回連行され、そのうち三回投獄の経験を持っております。五年二ヵ月弱の間、私は獄中におりました。こういう苦難の経験を強いていくところの構造が何であるかということですが、端的に申し上げますと、執権者、権力をとっているものは実は法を守らなかつたけれども、しかし、私自身はこの法にきわめて忠実であらうとしたという、そのことにつきます。

一〇年前、私が高麗大学を解職されたときの事情は次の通りであります。それは、いわゆる維新体制ができた直後のこととあります。高麗大学というのは、李承晩政権を打倒するきっかけをつくった学生デモが起こつたことで知られる大学であります。独裁者であつた朴正熙大統領がこの大学に大変

関心を持たざるをえなかったのは当然のことでありました。当時、私は大学の労働問題研究所の所長をしていましたが、私の研究所に所属をしていた二人の職員が、地下新聞をつくったという理由でもって拘束されました。休みが終わった直後に、情報部(KCIA)からこの職員に給料を払うなという命令を受けました。

私は特別に勇気がある者ではなかった。だから、すぐに返事はしなかった。研究所の理事会を開いて相談したいと思っただけです。しかし、不思議なことに理事さんたちは集まってくれなかった。結局、私は法の定めに従って給料を支払わなければならぬと考えました。なぜならば最終判決が大法院で下りるまではこの人たちは無罪だとみるべきなのが法の定めているところだからであります。しかし、このために私はKCIAの地下室に連れてゆかれて強制的に辞職届を書かされました。これが最初の経験であり、それ以後、一五回連行されました。フィリピンのアキノさんが暗殺されたとき、ソウルのフィリピン大使館の前でデモをして、二日間拘留されました。それがいまのところ最後の連行です。

執権者は当時明らかに法に従っていませんでした。私は法の秩序に従ったがゆえに、サラリーを払わざるをえなかったためであり、それ故に大学を追放されました。ここに、苦難の構造の一つの特徴があります。

自分が経験したことをいつも聖書に照らししてみるのが私の慣習でありました。「ヨハネによる福音書」に次のようなこ

とがあります。イエスが捕えられた後に問われたことは、おまえの弟子が何をし、おまえが何をしたかということでありました。イエスは、私は何をしたかを、おまえはすでに知っているながらそういう聞き方をするかと問いかえしました。

私がどこかで話したことは、すでに情報部によってテープに録音されている。それなのに、なぜ私に聞かなければならないか、これが執権者に私が問いかえすことであります。私は国が決めた法律に、国が満足するように法律をきちんと守ったのに、なぜ私にそういう問いかけをするのかということであります。

二番目に、高麗大学を追放されたのは、ベトナム戦争が終ったときに、わが国の政府はその波及を恐れて大学を休校にしたのですが、その大学の休校処分が解除されたときでした。休校処分が解除されるためには、九名の教授が追放されなければならぬといってきました。その九名の中に私が入っていました。

私は、私を本当に追放したかったら、大学の人事委員会の取り決めに従って追放して欲しいと、主張しました。私の主張は、政府が新たに取り決めた悪しき法ではなくて、依然として学校に残っている、古くから大学を取り仕切っている人事委員会のルールに従って処してほしいというものでした。執権者は、現在の法ではなくて、新たに悪しき法をつくって教授を追放しようとする。即ち、法によって処罰をすることができなくなると、執権者はみずからその法を捨てて新しく

悪しき法をつくる。これが苦難の構造の第二の特徴です。七年にいわゆる三・一民主宣言に関係したということで私が投獄されなければならなかった理由も、大統領が急に作りだした緊急措置九号に違反しているということでありました。私は法の定めに従い、政府はこれに対して悪しき法をつくり、その悪しき法を私が批判したがゆえに、私は投獄生活に甘んじたのです。

しかし、ここからもう一つ進展した経験があります。やがてそれはさらに進んで、執権者は自分が取り決めた悪しき法を、執権者自身が守らないようになるのです。

即ち、八〇年に入りまして、金斗煥は自分が政権をとるがために、何ら罪のない私どもを全部ひくくって投獄したわけでありました。このときが私の三度目の解職のときでもありますが、いわゆる金大中氏事件というものであります。金大中さんを中心に内乱を陰謀したというのです。しかし、全くそういうことはなかった。そこで五五日間、私どもを中央情報部に閉じ込めて、拷問を加えてその間に問題を造り出したのです。そのところを一つ考えてみましょう。

われわれはいったい何なんだろうかと考えるのです。私はある意味でお父さんの言うことに従順な子供であったんだといえます。

お父さんは自分では本を読まないのに、子供に向かって本をよく読み、よく勉強しなさいと言ったとき、私はそのお父さんの言葉に従ってしっかり勉強した子供であるのです。そ

してお父さんは読書をしないだけではなしに、時には、酒を飲んできて、息子に、勉強などするな、酒を飲めといい、時には暴れるようなお父さんであるのです。にもかかわらず、息子である私は本来のお父さんの善意に従って酒も飲まなければ、一生懸命に勉強する、そういう子供であるのです。外でお祝いごとに参加して、うんと酒を飲んで帰って来て、暴力を振うようなお父さんでもあったとしても、私はその難を避けて便所の中に入っても、最初にお父さんが願ったように一生懸命勉強するような、そういう子供でありました。ソクラテスが権力がくれた毒杯を甘んじて飲んだこと、そのことにある意味でかわって来るように思います。なぜ逃げるができるのに毒杯を飲まなければならないかと、弟

韓国問題キリスト者緊急会議発足10年記念集会 韓国民主化運動と共に10年

●日韓キリスト者連帯の展望

■日時・プログラム・場所

1月28日2時～6時 講演・シンポジウム
(中嶋正昭・大塩清之助・和田春樹ほか)

1月29日4時～8時 祈禱会・交流会
於・早稲田奉仕園(地下鉄早稲田下車)

■両日を通じて、会場で歴史的な写真・資料・書籍を展示しております。

■会費・28日：千円／全期間参加：三千円

■詳細は同会議事務局へ：03(6600)8888

韓国民主化開争の国際的な連帯のかねめとして活動してきた10年間の歩みをふまえて、この開争の現在の課題と将来を共に語りたいと思います。

子がソクラテスに問いました。しかしソクラテスは、執権者がつくった法を、その執権者自身が守らないにもかかわらず、法に従うことによって執権者に抗議するために結局毒をあおったのではなかったでしょうか。

苦難の中の喜び

多くの私の友人たちの経験をこの構造にあてはめて申し上げることは十分にできるので、私はそれを時間の関係で差し控えたいと思います。

結局、こういう苦難を通して、私が何を得たのかということとを語らなければいけません。一つは、「良い法律」を最後まで自分が守って行く生き方をする、この生き方を学びました。しかし、良い法律を守って行こうとすると、そこで受けなければならぬことが二つありました。

その一つは私を苦しめているものとの対決であります。もう一つは麻痺して行く私の肉体との闘い。やがて死を連想しなければならぬ、そういう犠牲と自分自身が対決をすることでありました。私は本当に神様に感謝したのは、やっぱりこういう対決において私が敗れることがなかったということとであります。もし私を苦しめている人を憎んだとしたならば、私は本当に失敗した人間に終わったでしょう。もし、私が矯正所の中で弱まってくる体のために参ってしまったならば、私は容易に挫折をしたはずでありましょう。私は神の恵みのうちにおかれながら、苦難が実は強い信仰をもたらすと

いうことを学びました。

私を苦しめる人々のタイプには、いろいろあります。たとえば、一九八〇年「いわゆる「ソウルの春」のとき」に私は高麗大学に復職いたしました。そのときに、学校当局が、朴政権の時代に独裁政権に協力した教授たちをどうしましようかと、私に問うてきたのです。私は申し上げました。彼らは民主回復されるまでは大学の講壇に立つてはならないと、しかし、彼らに給料はきちっと支払われ、研究費も支払わなければならないと、そういう助言をしました。

そのうち、一四回目の逮捕をされたときに、私はムチ打たれる経験をいたしました。はじめての経験でした。しかし私を殴りかける人に向かってこういう考え方が浮かんでまいりました。君も一度しかない人生をこのように生きているのに、どうしてこの罪のないものをこうして殴ってそれによって君自身が生きているんだと、自分の心の中に、そう問いかけて憐みを抱いていました。

そのように体が痛めつけられて弱まって行くそういう中で、神の恵みを私は探し求めました。韓国の矯正所はうんと寒うございます。もちろん、暖房設備などあるわけではありません。寒いから何回も夜中に目が覚めるのです。一度、どういうわけか、自分はなぜか笑いながら目が覚める、そういう経験をしました。もし看守が笑っているこの私を発見したら、あれは気がふれてしまったのではないだろうかと思うのじゃないかと思い、私はあらためて壁に向かって笑いかけま

した。

ここには快樂はない。しかし、なぜ笑うのか。それは快樂と喜びというものは違う系統から出てくる感情だからです。快樂は、肉体の秩序・仕組の中から出てくる経験ですが、喜びというのは神様から与えられるものであります。本当の喜びは、やっぱり苦難の中から与えられることを知る、そういう体験を私はいたしました。

私はこのあいだ矯導所に行ったときには、私の妻にこう言いました。そのときは私が死刑を受けるに違いないという恐怖にかられている、そういう瞬間でした。しかし私は「外に見える木というのは、最初からそこに木があるのじゃなくて、タネがあつて、そのタネからあのような木に育っているのじゃないか」というふうなことを妻に言ったようです。死に直面できるという勇気が、かえってそういう余裕を心の中に芽生えさせたということですが、もっと正確にいえば、死という極限の犠牲において、肉体的なものを無視することによる喜び、即ち、神を愛することを知りえたのです。死に直面するその瞬間に、実は本当に生ける神に直面している、そういう経験をしえたのであります。

民主主義はつくり出すもの

現代社会の構造は、どこにあつても、五つの層によって形成されているのじゃないかと思ひます。極左と極右があつて、中間の部分があつて、そして穩健な左と穩健な右、この

五つの層があると考えます。

私たちの苦難が、このように五つの層になっている現実政治とどう関わっているかが問題ですが、極端な苦難を経験し、そのことによって神の愛を知ったものは、教条的な唯物論者になることは絶対できないのであります。また、人間を愛し、自分を殴りかけているものにむしろ哀れみを感じるものは、独裁者の存在を許すことはできません。独裁者以外の人々は、ある意味でみんな可哀想な人なんです。人間は全斗煥だけではないのです(笑)。

そういう意味で民主主義社会とは、穩健な左と穩健な右と中間だけが存在するものだろうと思ひます。そして、この三つの社会層が統治されるためには、良き法によって統治されることが必要です。お父さんのいうことを、どのような状況にあつても自から守りつづける人々、徹底的に本来の法に忠実であろうとする人々によって民主社会は実現されるのです。その意味で、韓國の現実も、韓國の歴史も教訓的でありましょう。

韓國の反体制運動の特色は非暴力にあります。この点で韓國の経験は、他の國の反体制運動の経験とは少し違つております。反体制の人々を捕えて、飛行機からジャングルの中に落として殺してしまう、そういう國もあります。多くの人がそのような危害を加えられております。それは反体制と権力者との戦争というべきものであります。しかし、暴力に対して暴力で手向かうからそこで戦争が起るわけです。

韓国において七〇年以來の反体制の重要な人物は宗教知識人から出ております。歴史をさかのぼってみますと、一九一九年の三・一独立運動も非暴力の運動でした。さらにさかのぼって、東学革命も、宗教的なモチベーションを持った非暴力運動でした。

一九五八年のヨーロッパ八カ国の統計があります。その統計によりますと、極左が一四％、穏健な左が二三％、キリスト教政党に属している人たちが三七％、穏健な右が一二％、それから極右が一二％、こうなっております。キリスト教政党は中間におかれているのです。これは一九五八年の統計ではありませんが、ヨーロッパの伝統といえます。ところが、ご承知のように、英国とアメリカにはいわゆるキリスト教政党というものがありません。それはイギリスとアメリカの反体制の人物は、多くがその当時のキリスト者からでたからであります。その点で、何故かわかりませんが、われわれの国における現実と伝統はアメリカとイギリスの形態に非常に近い、そう言うことができるのではないのでしょうか。

結論として申し上げたいことがあります。

民主主義はやはり自分でつくり出さなければならぬ、他人が付与してくれるものではないということです。それだけに私たちの苦難は深くなるでしょう。韓国の苦難は、韓国の軍隊と韓国のビューロクラシーと、そして外国勢力の支持のために深刻になることは明らかです。八〇年五月の軍事独裁の再登場を支持したレーガン大統領の政策は、明らかにアメ

リカの建国精神そのものに反しております。このレーガンさんがまた韓国に来るといふのです。私は彼が韓国にこないことを心から願っております。しかし、彼が来たとしてもなんとか耐えて行きたいと思ひます。もし彼が来て、全政權を継続的に支持するならば、抑圧はもっとも強まって行くでしょう。

しかし、そういう苦難が強まれば強まるほど、われわれの希望もより大きくなります。この希望の内容は民主主義の実現であり、苦難だけがこの希望を生み出す契機だと信ずるからであります。

(イ・ムンヨン 前高麗大学教授)

メッセージ II 金泳三

私はNCCJ(日本キリスト教協議会)が、軍事独裁下で苦難にみちた闘争を展開している、韓国民衆に対する深い愛と関心を示して下さっていることに深い感謝を表わすものです。

特に、私の断食期間中、みなさま方日本国民が、韓国の民主化と私の生命の安全について、深い関心と励ましを送って下さったことに御礼申し上げます。

主キリストが身をもって教え給うた兄弟愛を実践するための今回の集りに招請して下さったことを感謝しております。私はここに出席してみなさまの愛に応えることができないことを、たいそう残念に思っております。

去る五月、私の断食期間中韓国の権力当局は、私の二年に及ぶ自宅軟禁を解き、伝えられるところでは、私の行動を自由に、